

保田良雄
カフカズに星墜ちて

文藝春秋

カフカズに星墜ちて
良雄

保田良雄（やすだ・よしお）

1930（昭和5）年12月、大阪生れ。54年、関西学院大学経済学部卒業。同年オランダ系ナショナル・ハンデルス銀行に入行。64年、米系コンチネンタル・イリノイ銀行に入行。外国為替ディーラー、外為課長、業務推進部次長などをへて83年に退職。初めて書いた本作品で、85年第三回サントリーミステリー大賞読者賞を受賞した。

カフカズに星墜ちて

第三回サントリーミステリー大賞読者賞受賞作

1985年 6月30日 第1刷

著 者 保田良雄

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03(265)1211(代)

定 価 1000円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 中島製本株式会社

『カフカズに星墜ちて』 目次

プロローグ

5

第一章 謎のプラチナ

9

第二章 テロリスト

106

第三章 アマチュアとプロ

148

第四章 凍りついた滝

210

エピローグ

280

あとがき

284

装幀 福田隆義
地圖 高野橋康

カフカズに星墜^おちて

第三回サントリーミステリー大賞読者賞受賞作

プロローグ

十二月二十六日、ジュネーブの日本総領事館から外務省電信課に、奇妙な一通のテレックスメッセージが入電した。クリスマス前後は外国の政界も休暇で情報は少ないので、入電の量も通常よりはない。従ってジュネーブからのその電文の内容は、異色さという点ではかなり目立っていた。

世界各地にちらばっている在外公館が打つ公電は、国際電話回線を通して外務省に入ってくる。宇宙衛星や海底ケーブルを経由して、ごく一般の商業回線で入ってくるため、誰かがその気になれば傍受することは可能だ。だから当然のこととしてメッセージは暗号化されている。

これらの暗号は、不規則に並んだ数字の乱数表とアルファベットの乱字表を組合せて作られている。乱数表と乱字表は複雑なプログラムでコンピューターライズされ、コンピューターは反復のないアルファベットの乱字を無限に発生させ、フロッピーディスクに記憶させる。

そのフロッピーのコピーが在外公館に配布され、オリジナルは本省に置かれる。原文のメッセージをコンピューターにインプットし、乱字のフロッピーを差し込むと、原文は自動的に暗号文にコンバートされる。乱字を全部使いきるとそのフロッピーは破棄され、新しいものが補充される。同じ組合せの暗号が二度使用されることはない。

従つてこの「無限乱字システム」では、文字の使用頻度^{ひんど}を分析して解読することは、不可能になる。仮にひとつのメッセージの原文とそれに対応する暗号文が盗まれても、フロッピーそのものが常に新しいものになるのだから、あまり意味がない。

暗号解読用のコンピューターはテレックスの受信器に連動しているが、部屋全体は電子ロックでガードされ、特別の磁気カードの所有者でないと入室はできない。コンピューターのパスワードも絶えず変更されており、特定の電信官以外に知っている人間はいない。

電信官によつて解読されたメッセージは関係部署に届けられるが、その相手の人物も、電文に指示された『取り扱い注意』『秘』『極秘』のランクに従つて階級がそれぞれ上つてゆく。

クリスマス明けのその朝、比較的少ない量の入電に混じつて入ったジュネーブからのテレックスも、このステップを踏んで解読され配布された。電報は『取り扱い注意』を表わすバインダーにとじられて欧亜局の主要デスクを一巡した後、最終的には調査室長のデスクに届けられた。

調査室長はテーブルの上に置いてあつた太縁の眼鏡をかけて電文を読みはじめたが、しばらくするとその顔にげんそうな表情が浮かんだ。

『十二月十四日、当地フランスワ・デュソ通りにある時計メーカーのゼロール本社に、或る人物が十キロのプラチナ延べ板五枚を売りに来たが、それには、THE MINT BUREAU OF MINISTRY OF FINANCE OF IMPERIAL GOVERNMENT OF JAPAN 1944という刻印が押されている。ゼロール本社では品質鑑定のため現物を預かり、刻印に関しては取引銀行スイスバンクコーポレーションを通じて東京銀行本店に信用照会をしたが回答不能の返事を得た。当該刻印からみるとプラチナは日本政府発行のものと判

断されるので、ゼロールは延べ板の拓本と写真を当総領事館に持ち込み調査を依頼してきた。ゼロールとしては刻印の真偽は問わず、日本国内での盗難事件に関係がなければ買い取る意志があると言っており、持主の言によれば同種の延べ板はなお相当量保有しているとの事である。尚、ゼロールは問題の人物の氏名を明かす事を拒否しているが、西欧人である模様。拓本等は外交行のうで送るので調査を依頼する。また、こちらの取るべき態度に就いて指示願いたし』

調査室長は読み終わると眼鏡をはずしてテーブルの上に置き、ひきかえにキャビンの袋とライターを取り上げ、中身を一本引き抜いて火をつけた。彼は椅子の背もたれに首をあずけ、天井に向かってキャビンの煙をひとしきり吹き上げていた。

たばこが半分位の長さになった頃、彼は体をおこし室内をひとわたり眺めまわした。東京タイムを表わす壁の時計はもう正午を回っており、部屋には調査官が一人しかいなかった。

室長はその調査官の横顔をちらと見てから気のない声を出した。

「江木君、ちょっと」

江木と呼ばれた調査官は椅子から立ち上り、ゆっくりと室長の席に歩み寄り、
「なんででしょう」

と答えた。室長はテレックスのコピーを江木に手渡しながら、こう言った。

「ジュネーブからこんなことを言ってきた。君、調べてみてくれんかね」

「はい」

江木は無造作にそのテレックスを受けとり、自分の椅子に戻って読んだ。読み終えた江木が室長の席を見ると、もう彼はそこにはいなかった。みんな食事に出かけてしまっていて、部屋に残っている

のは自分一人だったのである。

丁度、コンピューターの乱字発生機が気まぐれにアルファベットを吐き出すように、江木順介も全くの偶然からこうしてその役目を仰せつかることになった。

第一章 謎のプラチナ

1

午後二時過ぎ、江木は大蔵省の国有財産総括課の木村という職員デスクの前に座っていた。大蔵省の建物は科学技術庁と道路ひとつをはさんだ外務省のすぐ隣にあり、江木はこれまで外為市場の情報交換するため、何度も足を運んだ事がある。

中年で前頭部の毛髪が後退した大蔵省の職員は、絶えず鼻の上からずり落ちそうになる眼鏡の縁を左手の人差指で突き上げながら、口をとがらしたりすばめたりして、江木が差し出したテレックスを読んだ。

そして読み終わると、

「ひょーっ、なんですか、こりゃあ」

と奇声を発して椅子の上の尻をもそもぞとくねらした。江木が思わず微笑すると木村も笑いながら言った。

「この英文のところ、大日本帝国造幣局ということでしょうな」

「でしようね」

「ゼロールっていうのは高級時計のメーカーですな。それにしても一九四四年ということは昭和十九年、終戦の前の年かあ」

「いささか信じがたい話なんですが」

「造幣局の東京支局へ聞いてみられましたか」

「そちらでは分からないという返事でした」

「プラチナの延べ板なんてその時代にあったのかなあ。しかしなんでそんな刻印が押してあるんだい。まゆつばものですよ、これは。古い記録調べても出て来っこないですよ。どうしてもとおっしゃるんならお預かりしますが、時間かかりますよ。そして、まず、該当物件存在せずってところでしうな」

相手の机の上に右ひじを立て、親指と人差指で下唇をつまむようにして、江木が考えこんでいると、木村が、

「どうします」

と浮かぬ声で駄目を押すように尋ねる。

「ええ、おっしゃる通りでしょうね。でも、ほうっておくわけにもいかないし。私、大阪の造幣局へ行ってみます」

と江木は答えた。木村はうって変った元気な声で、

「そうして下さい、それが一番ですよ」

そして、やや声をひそめて、

「然しあそこも、なんですよ、空襲ですっかり焼けましたから、資料はむづかしいかも知れませんよ」

と言った。江木が腰を上げて、

「どうもお手数おかけして」

と礼を言うと、木村が付け加えた。

「もし古い人に当たるとなれば、名簿はこちらに揃っていますから、いつでも見に来て下さい」

外務省調査室に帰った江木は室長に簡単な経過報告をしたのち、

「外交行囊が到着したら、私、造幣局へ出張してみようと思うんですが」

と言ってみた。室長はしばらく考えこんでから言った。

「ほんものか偽物かは分からんが、とにかく日本の造幣局の刻印のはいったしろものを変な外人がヨーロッパで売りに回るとなれば、こちらの信用問題にもかかわる。ゼロールに回答をするしないは別として、一応こちらサイドとしては納得のいく調査をしなければならぬだろうな。偽物なら偽物でいいんだ。こういうものが出回っているようだが、我が国としては一切関知しないと、各国にインフォームする必要がある。上のほうの了解は取っておくから、君が正式に担当してやってみてくれ」

「分かりました。それで取りあえずジュネーブにはどうやってやりますか？」

「調査には相当時間がかかると言ってやれ。事実そうだろう。それと、問題の人物の名前、国籍ぐらい探りだすようにブッシュしてみろ。犯罪との関連性有る無しにかかわらず、情報出すのならギブアンドテイクだと、先方に伝えろってな」

江木は言われたままテレックスのドラフトを作って室長の許可印を貰い、電信課宛のボックスにほうり込んだ。自席に戻ると江木はつぶやいた。

「一九四四年か」

それはもう彼にとって、歴史の教科書によって認識し得る年代であった。

2

外交行囊が到着したのは、官庁の御用納めの日であった。江木は問題のプラチナ延べ板の写真と拓本を小会議室で初めて見た。会議室には、調査企画部長と調査室長のほかに、大蔵省側から国有財産監査官室長と造幣局東京支局長が同席していた。

写真は四ツ切位の大きさのカラーで、黄金色のクロスの上にたばこの箱と並べて置かれた延べ板を実物大に撮っており、ハレーションもなく、一見して専門家の手によるものに見えた。延べ板は長さ二〇センチ、幅八センチ、厚さ四センチ位の立方体で、プラチナの銀色の光沢は失われ、ところどころ紫色の雲形模様が浮き出て、むしろ全体としては黒ずんで見えるその表面の右下に刻印が押されている。それは特別なデザインのものではなく、刻印というよりも単に英文タイプの文字のようなものが四行に刻まれているだけで、その周囲に架空の線を引くならば、恐らく一〇センチと四センチ角位の長方形になる筈である。拓本のほうも白黒で字がはつきりと読めるというだけで、写真のそれと大差はない。

「こんなものなら誰にでも彫れるじゃないですか。造幣局のやった仕事じゃないですよ」

と支局長が言った。

「いかにもお粗末ですな」

と監査官室長が同意を表わす。

部長がたばこに火をつけるのを見て、室長も江木もそれにならった。

外務省の中では限られた事務机の上に、ボール紙製の小さな立て札が立っていることがある。それ

には駐車禁止の標識に似せたマークの内側にたばこの絵が刷りこまれてあり、その下に『THANK S FOR NOT SMOKING』という文字が印刷されている。アメリカ帰りの連中が、向こうではこんなのが流行っているんだよと持ち帰ってきたのが、何時の間にか女子職員の机の上に置かれているのだ。妙なものが上陸して来やがったなど、おかたの男子職員は腹の中ではにがしく思っている。

数条の細い煙が天井に達した頃、部長が大蔵省側の人間に向かって口を開いた。

「どうでしょうね、これは今ご覧になったようにいい加減なしろものですし、あなたの方のほうにも記録がないようですから、こちらで適当に調査して返事をしてやってもいいですかね」

監査官室長がほほ笑みながら答えた。

「結構ですよ。いや、そのほうが助かるんですよ。これからは予算編成や課税の時期で忙しくなりますのでね」

こんな馬鹿馬鹿しい事には関わってられないのだと、言外にそう言っていた。

「そうでしょうね、それじゃこれはこちらでやらせてもらいます。然し形だけは造幣局のほうへお邪魔することになりますよ」

「いいですよ。大阪のほうへは言っておきます。それから一応レコードに残しますので、そいつの複写を頂けませんですか」

と東京支局長が言いながら、腕時計を見た。文字盤の周囲を歯車の様な刻み目が囲っている特徴のあるデザインは、ゼロールのものに相違なかった。

大蔵省の二人は帰って行き、会議室に三人が残った。部長が江木に言う。

「そういうことで君、まあ調べ甲斐ないかも知れんがやってみてくれ。ただね、私一つだけ気になる

のはね、1944という数字なんだよ」

「それが何か」

と室長が尋ねる。

「いや、もしそれが西暦を表わしているのだとしたら、戦争の終る前年だろう。あの頃プラチナと言えは何を思い出す？」

江木はその頃まだ生れていない。

室長が少し考えて答えた。

「国民が指輪とか時計とかを供出したそうですね」

「だろう。それ以外は考えられないんだよ。戦争中で資材は輸入できず、プラチナも底をついたから国民から強制的に取りあげたんだろう。もしそれに関係ありとすれば、大変な事になるよ、これは」

「それを精錬して延べ板にして、誰かが隠匿^{いんごく}しておいたという事になりますかな」

室長がなにか冗談めかして言った。

「まさか。大蔵省は戦後、あれを全部競売で処分した筈だからな。けれどもしそういうのがあって、それが闇のルートで今頃国外に流出したとしたら、どうなる。大臣の首くらい飛びかねないよ」

部長がにやりと、笑った。

「江木。君はえらいものに巻き込まれたなあ」

室長が江木の顔を見て冷やかすように言った。

「内閣調査室のほうでやってもええないんですか」

と江木は言ってから、しまったという顔つきをした。

「馬鹿。お前何年外務省の飯食っているんだ。うちの出先でこんなニュースがありました、どうぞお